

安楽寺だより

第50号

紙面内容

- 2面 「語り部に感動」野呂美道師
- 3面 戦時下の生活を聞く―企画展―
- 4面 日本仏教史(補足) 蓮如上人6

編集・発行 安楽寺住職 吉田 和良
 名古屋市瑞穂区井戸田町一の八〇
 電話 〇五二(八四一)二六〇六

第9回 お釈迦さまの説かれた「治療法」とは？

お釈迦さまは、自らの青年時代の悩み・苦しみを通して「人間の苦の原因は何であるか?」「苦を取り除くためにはどうすればよいか?」を深く探求されました。そしてお悟りの最初と言われて
 います『四諦』(四つの真理)を説かれました。

まず第一は苦諦(くたい)です。人間の逃れることのできない「苦」の実体を正しく理解すること、第二は集諦(じつたい)です。「苦」の原因を明らかにすること。第三は滅諦(めつたい)「苦」から自由になる状態。そして第四は道諦(どうたい)「苦」を滅して安らぎ得られる理想の境地に至るには、どうすればよいかの実践方法(八正道)を明らかにされたのです。

『四諦』という仏教の根本的なおしえは、当時の医学的な考え方と深く関係があります。

医者(い)が病人(び)を治す場合には、まずどこが悪いのかを知り、病状(び)を正確(さ)に診断(し)することです。次に、



病(び)気(き)の原(げん)因(いん)を探(た)らなく(は)な(り)ま(せ)ん。原(げん)因(いん)が判(は)つた(ら)ば、目(め)的(てき)とす(る)健(けん)康(こう)状(じょう)態(たい)に戻(も)っ(て)い(か)な(く)て(は)な(り)ま(せ)んが、ま(づ)健(けん)康(こう)な(じょう)態(たい)と(は)何(なに)か(を)正(ただ)し(く)知(し)っ(て)い(る)必(かな)ず

要(い)が(あ)り(ま)す。病(び)状(じょう)・病(び)因(いん)・健(けん)康(こう)状(じょう)態(たい)が判(は)れ(ば)、処(しよ)方(ぽう)箋(せん)・治(ち)療(りょう)法(ぽう)と(い)う(じゆ)体(たい)的(てき)な(は)つ(た)方(ぽう)法(ぽう)を考(かん)え(な)け(れ)ば(な)り(ま)せ(ん)。

お釈(しやく)迦(か)さ(ま)は、四(よ)つ(の)プ(ロ)セ(ス)で「苦(く)し(み)の(げん)因(いん)」と「治(ち)療(りょう)法(ぽう)」を説(せつ)明(めい)し(て)い(る)の(で)す。

人(にん)間(かん)は(ど)の(よ)う(に)生(な)き(る)べ(き)か(に)悩(な)み(ま)す(が)、「何(なに)の(ため)に(な)り(て)生(な)き(て)い(る)か」を考(かん)え(る)こ(と)は(少(せう)な(い)の)で(は)な(い)で(し)よ(う)か。ま(た)何(なに)か(の)障(しょう)害(がい)や困(く)難(なん)に(あ)つ(た)時(とき)、ど(の)よ(う)に(な)り(て)解(かい)決(けつ)し(て)い(け)ば(よ)い(か)と苦(く)し(み)ま(す)が、「な(ぜ)そ(の)よ(う)な(じょう)況(きやう)に(な)つ(た)か」と(い)う(げん)因(いん)を(あ)ま(り)考(かん)え(ま)せ(ん)。

こ(の)『四(よ)つ(の)諦(てい)』の(お)し(え)に(よ)つ(て)、私(わたし)た(ち)の(にん)生(せい)の(げん)実(じつ)が(く)で(あ)る(と)自(じ)覚(かく)し、自(じ)分(ぶん)を(み)失(う)し(て)な(く)自(じ)分(ぶん)の(げん)実(じつ)を(う)け(と)め、歩(あ)む(べ)き(みち)道(みち)を(ま)ら(か)に(し)て(ゆ)き(た)い(と)思(おも)い(ま)す。

人の苦の原因を除く治療法(四諦)を明らかにされる

定例法話を勤める



プロジェクターを利用して法話

三月十三日、定例法話をお勤めしました。小雨の降るあいにくの日でしたが、十名のご門徒の皆様にお参りいただきました。ご法話は、愛西市の野呂美道師（安泉寺前住職）に御出講いただき「お寺と防災」のテーマでお話されました。「昔からお寺は、地域の方が集う場所とし

「震災の語り部」に感動

ての機能がありました。地震や洪水などの大災害という緊急事態の時、お寺が避難場所として人のこころと生活を支える役割が期待されています。

今年で東日本大震災から十二年、私は毎年仙台に伺い、被災された皆様と関わってきました。海岸より一キロほどの所にある仙台市若林区の海楽寺は、津波で全壊しました。震災時小学生だった寺の大友柘人君が、八年後の高校生の時、被災した自分のランドセルに初めて向き合い、「震災の語り部」として勇気を出して話をする姿に大変感動しました。

私たちは、震災の体験談を聞くだけではいけません。近い将来起こる大災害に備えることが、辛い体験を語られる被災者の皆様の声を生かすことだと思いました。」

野呂さんは、愛西市の自坊でハザード（危険因子）マップを作成し、東南海地震などの災害に備えると同時に、避難出来る高台の設置を行政に要望する等の活動をしていることを、紹介していただきました。

春彼岸お墓まいり

三月十七日、八事霊園安楽寺墓地で、春のお彼岸墓法要をお勤めいたしました。風もなぐ穏やかな陽気で、早朝から多くの皆様にお参りいただきました。参詣されたご門徒さまの中には、お車で一時間以上かけて来て下った方もあり、ご先祖の方々に静かに手を合わせておられました。



午前十時三十分からは、永代供養墓の前でお勤めしました。

コロナ感染が始まって三年が経過し、今回は久しぶりにご参詣いただいた皆様もあり、亡き方々に思いをはせながらお焼香していただきました。

お参りいただいた皆様には、感謝申し上げます。

「戦時下の生活を聞く」

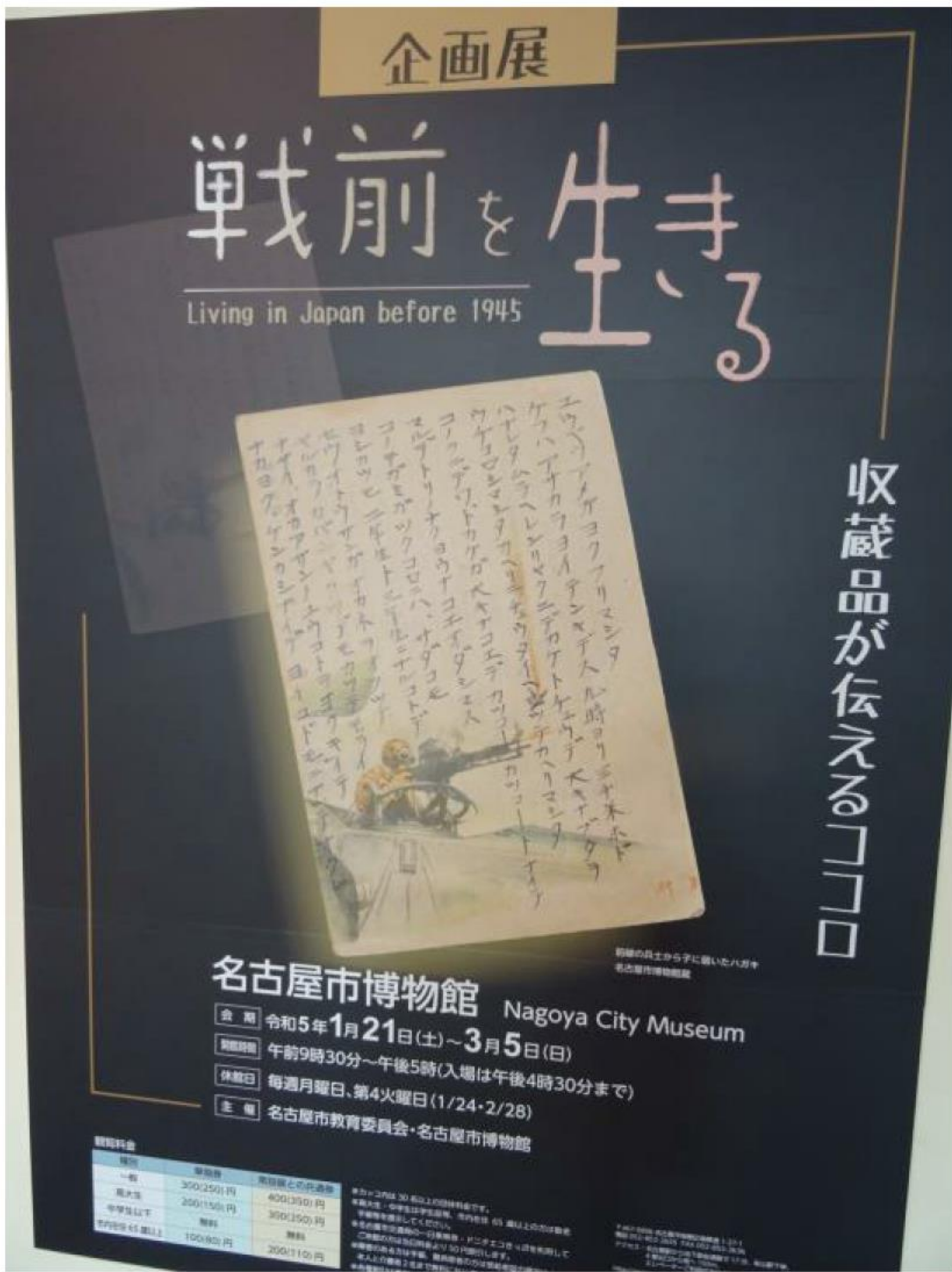
市博物館 企画展

先日、名古屋市博物館で、企画展「戦前を生きたる 収蔵品が伝えるココロ」を見学してきました。

一九四五年（昭和二〇年）の太平洋戦争終戦まで、日本国民は戦時体制の中で苦難の生活を強いられました。当時を体験された人々の多くは亡くなられて、直接お話しを聞く機会ほとんどありません。

企画展では、戦時中に発行されたポスターやカルタ、学童疎開先の通知綴そして名古屋空襲日誌などの品々が展示されていました。その中でも、出征された兵士と家族との手紙を拝見して心を揺さぶられました。

当時手紙は、常に国の検閲があり、家族から



戦争完遂の言葉が並ぶポスター

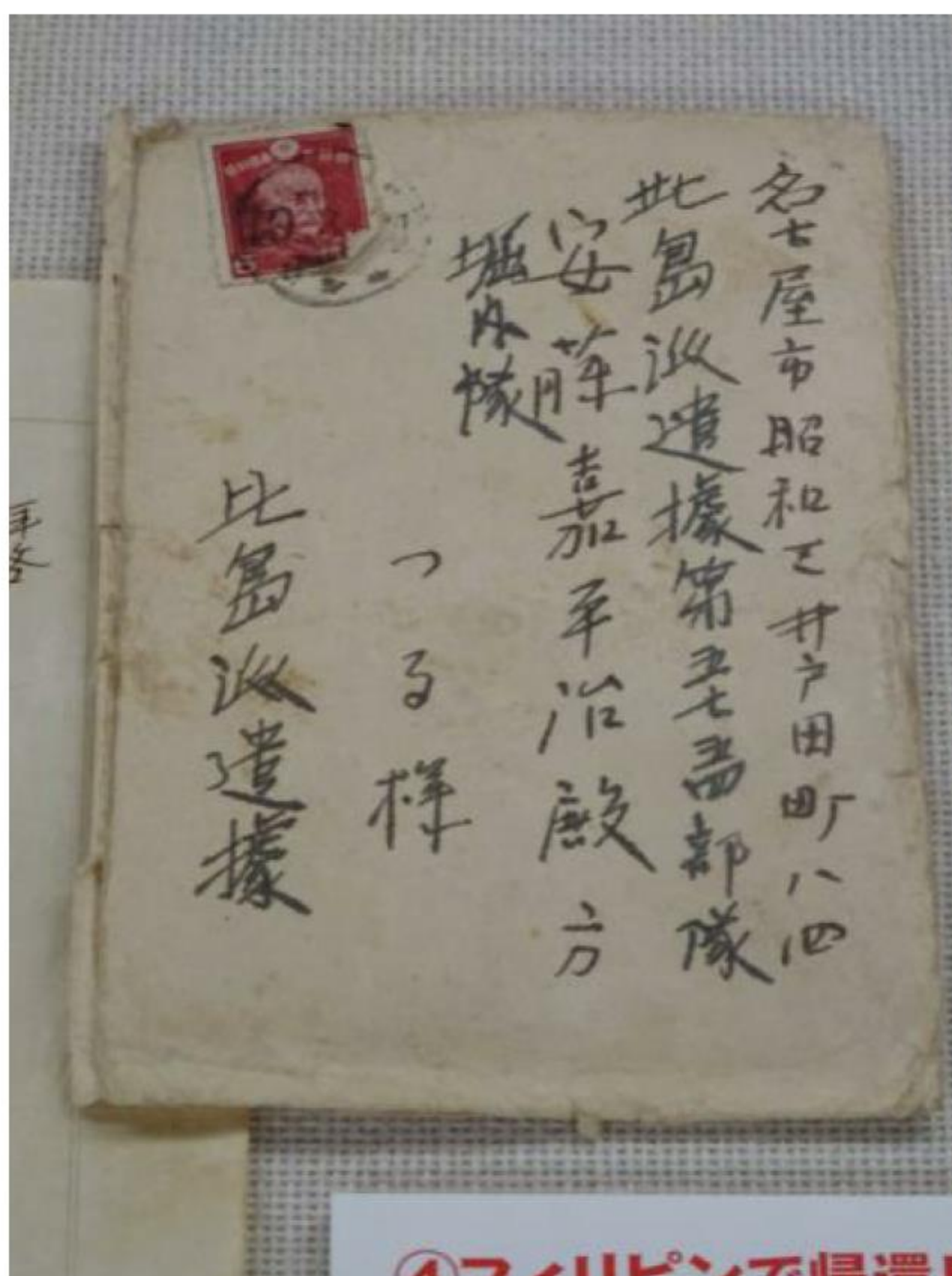
戦地の夫や息子への手紙には、率直な言葉が使えない中で想いを伝えるためご苦労された文面が綴られています。また戦地からの兵士の手紙には、家族への深い愛情にあふれた言葉にこころを打たれました。

会場で解説された博物館の学芸員が申された「銃後も戦場」という言葉には、戦時下の偽らざる状況を表わしていると思いました。

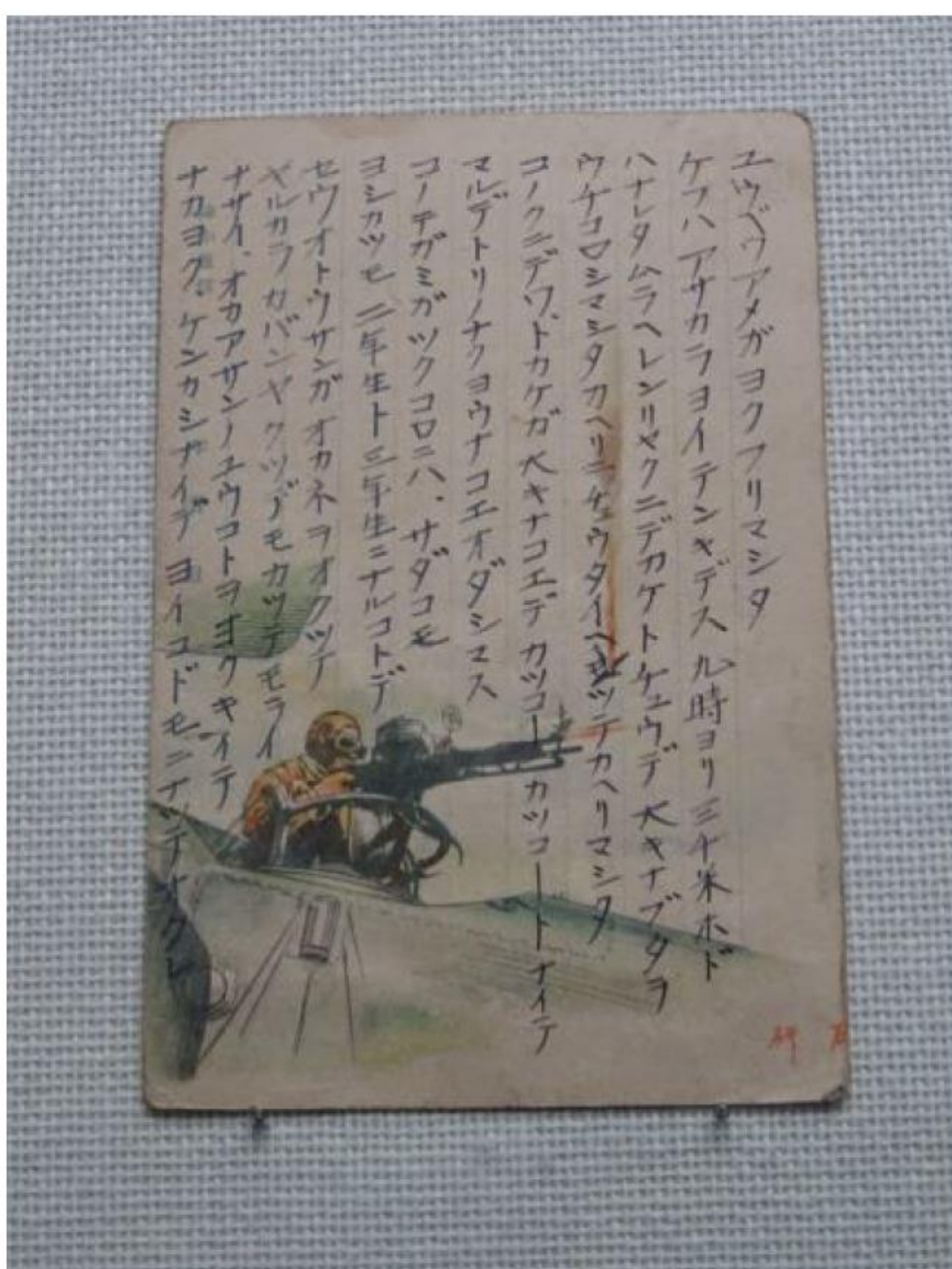
今回の企画展で展示された品々の向こうに戦時下で生活してこられた

一人ひとりの「生きた証し」を学び、何故戦争が始まってしまったのかを聞くことが必要だと思えます。

昨年から続くロシアによるウクライナ侵攻の現実を背景に、日本国内でも戦争の足音が聞こえてくる世情を冷静に考え、行動しなければなりません。



戦地のフィリピンからのハガキ



仏教豆知識

第五十回



日本仏教史

補足 蓮如上人6

⑪ 守護大名と対決する門徒勢力

北陸の本願寺門徒の勢いが増すことは、門徒の取る行動が、政治的にも宗教的にも既成の権威とのあつれきを余儀なくされていきました。

蓮如上人は、天台宗をはじめとする仏教諸宗の攻撃をうけて、本願寺門徒の他宗批判を強く禁じていました。

加賀の国（現在の石川県）で、守護の地位をめぐる富樫家兄弟の対決に巻き込まれ、門徒勢力が加担した兄の政親側が勝利しました。しかし、門徒勢力は年貢の減免などの経済的要求を越えて、一国の支配権を脅かすほどになっていきました。

蓮如上人は、次に述べる「六ヶ条の掟の御文」を出して門徒の反社会的行動を喰いとめようとされました。

「抑(そもそも)当流門徒中において、この

六ヶ条の篇目のむねをよく存知して、仏法を内心にふかく信じて外相にそのいろをみせぬようにふるまうべし。しかればこのごろ当流念佛者において、わざと一流のすがたを他宗に対してこれをあらわすこと、もつてのほかのあやまりなり。所詮向後この題目の次第をまもりて、仏法をば修行すべし。もしこのむねをそむかんともがらは、ちかく門徒中の一列たるべからざるものなり。

- 一、神社をかるしむることあるべからず。
- 一、諸仏・菩薩並びに諸堂をかるしむべからず
- 一、諸宗・諸法を誹謗すべからず。
- 一、守護・地頭を粗略にすべからず。
- 一、国の仏法の次第非儀たるあいだ、正義におもむくべき事
- 一、当流にたつるところの他力信心をば内心にふかく決定すべし。・・・」(三帖目十通)

文明七年(一四七五年) 七月十五日



昨年末から今年にかけて、実家の兄やご門徒の同年代の方が、がん治療を受けている話を聞きました。限りあるいのちだと理解していても、真剣に聞いていないわたしがありません。▼六年前に一〇五歳で亡くなられた日野原重明さんは、生涯現役の医師として活躍され、今では普通に使われている「生活習慣病」という名称を名づけられた人として著名なお医者さんです。▼日野原さんは多くの言葉を残して下さいました。「生まれてきたことは、それだけですばらしいことです」「人はいくつになっても生き方を変えることができます」などどこころに沁みる言葉ばかりです。▼ともすれば、老いを感じることも多いわたしですが、「いのちとは君たちが持っている時間です」「人生には無駄というものはないもの」との言葉をしっかりと受け止めて、人生を歩むことができたらと感じています。